

「存在の車輪」

——ハイデガーの1930年代の「性起」の思索における
歴史と神話の関係について——

クリスティアン・ゾンマー（フッサール文書館パリ、パリ科学文学大学）
訳 木本 蒼（京都大学）

„Rad des Seyns“

— Zur Beziehung zwischen Geschichte und Mythos
in Heideggers Ereignisdenken der 1930er-Jahre

Christian SOMMER

In den 1930er-Jahren entwickelt Heidegger in seinem Ereignis-Denken eine Mythologie, die die Verbindung zwischen Geschichte und Mythos thematisiert. Er interpretiert Hölderlins Dichtung als einen Gründungsmythos der Geschichte des deutschen Volkes, der den „Anfang“ der neuen Geschichte stiftet. Dabei wird die klassische Unterscheidung zwischen Mythos und Logos infrage gestellt, indem Heidegger auf eine archaische Einheit von Dichtung und Philosophie zurückgreifen möchte. Hölderlins Gedicht wird als eine „poetische Ansicht der Geschichte“ verstanden, die das Volk zu seinem „Seyn“ führt und ihm eine neue geistige Welt eröffnet. Diese Mythologie verweist auf ein tragisches Schema des Untergangs, das den Übergang zu einem neuen Anfang ermöglicht, wobei die „Revolution“ als grundlegende Umwälzung betrachtet wird. Heideggers Philosophie in den 1930er Jahren ist eng mit der Frage nach dem Volk und dessen Beziehung zu seinen Göttern verbunden, wobei Hölderlins Dichtung als der Schlüssel zur Konstitution des Volkes und seiner Geschichte betrachtet wird.

Keywords: Heidegger, Hölderlin, Mythos, Remythologisierung, Dichtung, Erinnerung, Geschichte, Götter,

Volk, Poetische Religion, Untergang, Tragik, Ereignis

キーワード：ハイデガー、ヘルダーリン、神話、再神話学化、詩作、想起、歴史、神々
民族、ポエジー的な宗教、没落、悲劇性、性起

凡例

- ハイデガーからの引用の訳に際して、既に訳のあるものについては適宜参照し、該当する邦訳ページ番号を〔〕内に記した。邦訳の全集番号は原文の全集番号と同じである。既訳については創文社(現東京大学出版会)刊行の『ハイデッガー全集』から引用を行った。
- ヘルダーリンからの引用の翻訳に際しては河出書房新社刊行の『ヘルダーリン全集』を適宜参照し、該当箇所する邦訳頁を〔〕内に記した。
- 訳者による補足を〔〕内に記し、適宜必要に応じて原文を()内に補った。
- 原文のイタリックには丸傍点を付した。

要旨

1930年代、ハイデガーは自身の性起の思索において歴史と神話を主題化する神話・学を発展させる。彼はヘルダーリンの詩作を、新しい歴史の「始原」を創設するドイツ民族の歴史の基づけの神話として解釈する。その際ハイデガーは詩作と哲学のアルカイックな統一性へと立ち返ろうとしており、そうすることで $\mu\nu\thetao\varsigma$ [ミュトス・神話] と $\lambda\circ\gammao\varsigma$ [ロゴス・学] の古典的な区別が疑問に付される。ヘルダーリンの詩は民族を「存在 (Seyn)」へと導き民族に対して新たな精神的な世界を開く「ポエジー的な歴史観」として理解される。この神話・学は新たな始原への移行を可能にする悲劇的な没落の図式を指し示しており、そこでは「革命」が根底的な変転と見なされる。1930年代のハイデガーの哲学は民族と民族の神々への関係に対する問い合わせと固く結びついており、その際ヘルダーリンの詩作が民族とその歴史の構成のための鍵と見なされるのである。

ハイデガーが1930年代にヘルダーリンと自己自身とのあいだ、 $\mu\nu\thetao\varsigma$ [ミュトス・神話] としての詩作¹ (Dichten) と $\lambda\circ\gammao\varsigma$ [ロゴス・学] としての思索 (Denken) のあいだで行った会話（「話 (Gespräch)」、「二人の間の言葉 (Zwiesprache)」）は神話・学 (Mythologie) として理解されうるものであり、彼の性起の思索 (Ereignisdenken) に深く根をおろしている²——これが我々の仮説である。新たな、もしくは「別の始原 (der andere Anfang)」としての思索と詩作は、「神話・学」³である。これは、ハイデガーが1942年の講義で定式化しているように、「歴史的『経過』」であり、そこにおいて「存在そのものが詩作的に現

¹ 以下を参照。「神話としての詩作」(HEIDEGGER, *Winke* (1931-1932), GA 94, S. 66)。以下では、基本的に、全集 (Gesamtausgabe (省略記号「GA」, Klostermann, Frankfurt/M., 1975-)) から引用する。タイトルは省略形式で表記する。

² 以下を参照。HEIDEGGER, *Zum Ereignis-Denken*, GA 73.2, S. 1277 :「性起の神話・学」。また、これに関しては、以下も参照されたい。C. SOMMER, *Mythologie de l'événement. Heidegger avec Hölderlin*, PUF, Paris, 2017.

³ 以下を参照。HEIDEGGER, *Einführung in die Metaphysik* (1935), GA 40, S. 165 [邦17頁]; *Koivóv* (1939), GA 69, S. 208.

象となって現れる」のであり、これによってハイデガーによれば「本質的思惟の意味における思索は、詩作に対する一つの根源的関係に」⁴立つことになるのである。

我々がこの批判的考察において再神話学化 (Remythologisierung) と呼称するよう提案するものに対してハイデガーはある思弁的な身振りを見せているのだが、この身振りは上記の仕方でミュトスからロゴスへの前進という図式を疑問に付す。そして初期のアルカイックな哲学と詩の根源的な共属性 (Zusammengehörigkeit) の段階を再活発化するために、この身振りはミュトスをロゴスによって超克する論理の否定を行うのだと言われる。だがハイデガーにとって重要なのはこの対立的で学問的な裂け目の手前へと回帰することである。

「哲学の根源的な *λόγος* は、*μῦθος* と結びついたままである。学問の言葉によって初めて分離が生じるのである」⁵。この回帰 (Rückkehr) はホメロスとヘシオドスに見られる *μῦθος* と *λόγος* の共存と目されるパラディグマに従って遂行される⁶。その際プラトンが『国家』第十巻 (607 b-c) で述べたポエジーと哲学の太古の争いは転倒される。つまり (ハイデガー的な) 哲学は *μῦθος* としての詩であるところの哲学の根源へと立ち帰ろうとする⁷。またとりわけ上記の理由からハイデガーは哲学に、なかんずく彼の哲学に、「ヘルダーリンの言葉を聴く耳を創造する」という「歴史的な使命」⁸を帰属させるのである。

ハイデガーによれば芸術作品の最も高い段階でありその本質であるところのヘルダーリンの言語作品の要は、それが歴史の悲劇的運動を「移ろいにおける生成 (Werden im Vergehen)」として記述している点に存するのではなく、歴史の原理 (Prinzip) を創設 (stiften) している点に存する。ハイデガーにとってヘルダーリンとは「我々の来たるべき歴史のもう一つの始原の唯一の詩人」⁹である。この意味においてヘルダーリンの詩作は民族の歴

⁴ HEIDEGGER, Hölderlins Hymne "Der Ister" (1942), GA 53, S. 139. [邦訳 162 頁]

⁵ HEIDEGGER, Wesen der Wahrheit (1933/34), GA 36/37, S. 116. また、以下も参照されたい。Was heißt Denken? (1951-52), GA 8, S. 11-12; Aufenthalte (1962), GA 75, S. 232; Das Ereignis (1941/42), GA 71, S. 320.

⁶ 以下を参照。J. STENZEL, Metaphysik des Altertums (1929/1931) in : A. Bacumler / M. Schröter, Handbuch der Philosophie, R. Oldenburg, München / Berlin, 1934, S. 30. ホメロスとヘシオドスにおける *λόγος* [ロゴス] と *μῦθος* [ミュトス] の共存の疑わしい範例については、以下を参照されたい。M. F. MEYER, « Die Bedeutungsgenese der Begriffe "mythos" und "logos" in der griechischen Antike », in : Archiv für Begriffsgeschichte, XLI, 1999, S. 37-45; J.-P. VERNANT, Mythe et société en Grèce ancienne, Maspéro, Paris, 1974 (La Découverte 1992), S. 196.

⁷ また以下も参照されたい。「思索は詩作を根源に持つ」(HEIDEGGER, Zu Ereignis IV (ca. 1935), GA 73.1, S. 566.)。哲学は「無限に神的な存在の詩作から [...] 生じる」(HÖLDERLIN, Hyperion, I, SW 3, S. 144)。ヘルダーリンからの引用は以下の版から行う。J. Schmidt, Friedrich Hölderlin : Sämtliche Werke und Briefe [省略記号「SW」], Bd. 1-3, DKV, Frankfurt/Main, 1992-1994. これは大シュトゥットガルト版 (Hrsg. F. Beissner (Werke) und A. Beck (Briefe und Dokumente), Bd. 1-8, Kohlhammer, Stuttgart, 1943-1985) を再掲したものである。引用の際には省略記号を用いる。ハイデガーは以下のハイリングラート版 (Holderlin. Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe (Norbert v. Hellingrathにより編集され、1916 年からは Friedrich Seebass と Ludwig von Pigenot によって継続された), Bd. I-VI, Propyläen-Verlag, Berlin, 1913-1923, 3. Auflage 1943) を用いており、ここでも場合に応じて参照し引用する。

⁸ HEIDEGGER, Beiträge zur Philosophie (1936-38), GA 65, S. 422. また以下も参照されたい。「思索的な試みにおいて、ヘルダーリンの詩作の未来を準備するだけで十分であるはずである。[...] 然り、ドイツ哲学の歴史的使命は、さしあたり、存在の真実のかの自覚 (Besinnung) を遂行することに他ならない。その自覚から、詩人に耳を傾けられる能力が、あの規定と声を、問い合わせの決断性と形の単純性を受け取るのである」(Zu Hölderlins Empedokles-Brunnen (およそ 1934-38), GA 75, S. 333.)。次も参照せよ。Überlegungen IV, 1934-1936, GA 94, 216; Überlegungen XV (1941), GA 96, S. 263.

⁹ HEIDEGGER, Rückblick auf den Weg (1937-38), GA 66, S. 426. また以下も参照されたい。Zu Hölderlin, GA 75, S. 336; Anfang, GA 70, S. 159.

史の始原を、つまり *ἀρχή* [始まり・原理] を¹⁰創設するのであり、そしてこの民族が詩の作用の結果として機能するのである。

ヘルダーリンによって創設された歴史は、しかしながら、ハイデガーにとってはただドイツの民族の歴史でしかあり得ない。「ところで歴史とは、つねにそれぞれの民族の唯一の歴史であり、ここではこの詩人の民族の歴史、すなわちゲルマニエン (Germanien) の歴史である」¹¹。それゆえ 1934/35 年の講義においてヘルダーリンは「ドイツ人たちを初めて詩作する」詩人として、そして「ドイツの存在 (deutsches Seyn) の創設者」として理解されなければならないという意味で、「ドイツ人たちの詩人 [ドイツ人を詩作する詩人]」(目的格としての属格 (genitivus objectivus))¹²と呼ばれる。さて、もしヘルダーリンの詩作がこのドイツ民族の歴史の *ἀρχή* (始原) の実現、すなわち「作品 [ないし働き] - の中へ - 置く (Ins-Werk-Setzen)」ことであるなら、この詩は根本的な *μυθος* として理解できる。この *μυθος* はドイツ民族に対してその「国民的なもの」(Nationelles) の時空を開くものであり、つまり新たな「ドイツ的 - 西洋的」ないしは「ヘスペリア [西ヨーロッパ] 的 - ゲルマニエン的」¹³な始原を創設するものであり、この始原は第一のギリシャ的な始原の歴史からは区別されるのである。

この基づけの機能 (Gründungsfunktion) においてヘルダーリンの詩作は「ポエジー的な歴史観」として、つまり「寓話」として現れる。

寓話、ポエジー的な歴史観、天上の建築学が目下のところとりわけ僕の心を惹きつけている。なかでもとくにギリシャ的なものとは異なっている民族的なものが。／英雄、騎士、王侯のさまざまな運命、彼らが運命に仕えるその仕方、あるいは運命のもとで懐疑的な態度をとるその仕方、これをぼくは普遍的な仕方で把握したのだ。¹⁴

寓話は歴史的出来事に対する特殊であると同時に普遍的な視線を提供する。寓話は経験的で具体的であって移ろい行く (ヘルダーリンが言う意味で「史的な (historisch)」) 出来事を、その「知的な (intellektuell)」要素である運命的な意味という観点の下に語るのである。この「知的」と「史的」という二重のアспектにおいて寓話は神話 ('言い伝え (Mythe)')

¹⁰ 以下を参照。HEIDEGGER, *Vom Wesen des Grundes* (1929), GA 9, S. 124; *Der deutsche Idealismus* (1929), GA 28, S. 24; *Metaphysik* (1941), GA 49, S. 77; *Φύσις* (1939), GA 9, S. 247.

¹¹ HEIDEGGER, *Hölderlins Hymnen* (1934/35), GA 39, S. 288.

¹² 同上, S. 220. また以下も参照されたい。Die gegenwärtige Lage (1934), GA 16, S. 333; Parmenides (1942/43), GA 54, S. 114. 「ドイツ人の詩人」としての、また「すべてのドイツ人のなかでも最もドイツ的な」者としてのヘルダーリン像は、「ゲオルゲ=クライス」〔詩人シュテファン・ゲオルゲを囲む支持者たちの集団〕における中心的なモチーフとなっていた。以下を参照。M. KOMMERELL, *Der Dichter als Führer in der deutschen Klassik*, Bondi, Berlin, 1928, S. 478; N. v. HELLINGRATH, « Vorrede zu Band IV » (1916), in: *Hölderlin-Vermächtnis*, Bruckmann, München, 1936, 1944, S. 125.

¹³ H.G.ガダマーによるこの定式化 (以下を参照)。«Hölderlin und die Antike» (1943), in *Gesammelte Werke*, Bd. 9, Mohr Siebeck, Tübingen, 1993, S. 2.) は、ハイデガーが 1930 年代ならびに 1940 年代にヘルダーリンに端を発して解釈を行った「西洋的なもの (das Abendländische)」の意味を要約するのにおあつらえ向きであるように思われる。また以下も参照されたい。「ドイツ - 西洋的な歴史」(*Hölderlins Hymne «Der Ister»* (1942), GA 53, S. 170. [邦訳 201 頁])。

¹⁴ HÖLDERLIN, *Brief an L. v. Seckendorff*, 12/3/1804 (SW 3, S. 471-472. [邦訳 476 頁]).

の使命と一致する¹⁵。ヘルダーリンは『宗教について』のなかの「続稿のための覚書」において以下のように断定する。「宗教的関係はその表象において知的でも史的でもなく、知的・史的、すなわち神話的である。その素材についてもその表出についても、そう言えるのである。それゆえ宗教的関係は素材の点を見ても、たんなる理念、概念、特性を含むものではないし、たんなる所与、事実を含むものではなく、はたまたその両方を別々に含むのではなく、両者をひとつにあわせて含むものである」¹⁶。

こうして神話は普遍的で知的なもの（概念、理念）を特殊で史的なもの（出来事、事実）の統合によって「より高い命運」の「精神的な生」と「特殊な領域」の「現実の生」¹⁷を統合する。神話は今や存在者と存在者の存在との差異を縫合し、詩の「（超越論的な）創造的な働き」を比喩として構成する「知的直観」¹⁸にこの縫合された差異を提供することを可能にする。「悲劇的な、外觀によれば英雄的な詩は、その意味においては理念的(idealisch)である。それは一つの知的直観の隠喩である」¹⁹。

理性の普遍性を感性の特殊性と宥和させようとする神話の概念によって、ヘルダーリンは1800年の『[ドイツ観念論最古の] 体系プログラム』の要請的指示に答えようとしており、そしてこの指示はハイデガーも1930年代に神話・学 (Mytho-logie) という「存在史的 (seynsgeschichtlich)」概念によって取り上げ、発展させようとしていたと思わしきものである。〔その『ドイツ観念論最古の体系プログラム』においてヘーゲルは次のように記している：〕「我々は新しい神話学をもたなければならない。ただしこの神話学は理念に奉仕しなければならない。この神話学は理性の神話学にならなければならない」²⁰。

普遍的な領域と特殊な領域との調停が、思惟 (Gedanke) と記憶 (Gedächtnis) との調停が、可能であるとするなら²¹、それは神話としての詩が本質的には想起 (Erinnerung) であるからであり、この想起において思惟(反省)と記憶とが一点へともたらされるのである。この点においてハイデガーはヘルダーリンの詩に民族の新たな歴史の「伝説 (Sage)」ないしは基づけの神話としての創設的機能を与えるのである。ヘルダーリンの詩は、それゆ

¹⁵ ヘルダーリンの概念ならびに神話 (Mythos) の復権（「言い伝え (Mythe)」、「神話的状態」）については、以下を参照されたい。U. BEYER, *Mythologie und Vernunft. Vier philosophische Studien zu Friedrich Hölderlin*, Niemeyer, Tübingen, 1993, S. 7-54, S. 55-103; G. BUHR, *Hölderlins Mythenbegriff*, Athenäum Verlag, Frankfurt/M., 1972; U. GAIER, « Hölderlin und der Mythos », in : M. Fuhrmann (Hrsg.), *Terror und Spiel*, Fink, München, 1971, S. 295-340; M. FRANCK, « Hölderlin über den Mythos », in : *Hölderlin-Jahrbuch* 27 (1990-1991), S. 1-31; C. JAMME, « Hölderlin und der Mythos », in : B. Frischmann (Hrsg.), *Sprache – Dichtung – Philosophie. Heidegger und der Deutsche Idealismus*, Alber, Freiburg/Brsig, 2010, S. 10-16.

¹⁶ HÖLDERLIN, *Über Religion*, SW 2, S. 568. [邦訳 41 頁]

¹⁷ HÖLDERLIN, *Über Religion*, SW 2, S. 562 ff. [邦訳 37 頁～]

¹⁸ HÖLDERLIN, *Werden im Vergehen*, SW 2, S. 450. [邦訳 46 頁]

¹⁹ HÖLDERLIN, *Über den Unterschied der Dichtungsarten*, SW 2, S. 553. [邦訳 29 頁]

²⁰ HEGEL, et al., *Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus*, in : *Hegel. Werke in 20 Bänden*, Bd. 1, Frankfurt/M., Suhrkamp, 1979, S. 235 [邦訳「ドイツ観念論最古の体系プログラム」, 所収: ヘーゲル(著), 村岡 晋一+吉田達(訳), 2017, 『ヘーゲル初期論文集成』, 263-266 頁]。また次も参照されたい。「哲学者が感性的になるために、哲学は、神話的にならねばならない」(同上, S. 233)、「哲学者は詩人と同程度の美学的な力をもっていなければならない」(同上, S. 234)。この意味において、民族は「理性的」となる。というのも、神話としての詩は、新たな「世界 - 遂行 - 像 (Welt-Vollzugs-Bild)」、「共同体的な世界観」を提示するのであり、その根源は神話学だからである。以下も参照されたい。HEIDEGGER, *Besprechung* (1929), GA 3, S. 255; E. CASSIRER, *Philosophie der symbolischen Formen, Zweiter Teil. Das mythische Denken* (1923), Verlag B. Cassirer, Oxford 1954, S. 8.

²¹ HÖLDERLIN, *Über Religion*, SW 2, S. 563. [邦訳 37-39 頁]

え、民族にその「根柢」($\alpha\omegaχή$)を、つまり「存在(Seyn)」を与えるような悲劇的な詩である²²。

1934／35年のヘルダーリン講義においてハイデガーは、「追想(Andenken)」の第59句(「だが留まり続けるものを／詩人は創設する」)に注釈を施し、『芸術作品の根源』において記述された芸術の(つまりは詩作の)三重の基づける働き——贈る、基づける、始める——を以下の仕方で、明示化している。

詩作することとしてのこの創設することは、また言うことであるという限りで、それは同時に企投(Entwurf)を言葉へともたらすこと——言うこと(sagen)と言われたこととして、すなわち伝言(Sage)としてこの企投を民族の現存在の中へ置き入れ、そのようにして民族の現存在をはじめて確立し、また基づけること——を意味するのだ。[…]他方、創設とはそのようにしていわば先んじて言われたこと、基づけられたことを開かれた本質(das eröffnete Wesen)への留まり続ける追想として保存し、救い出すことを意味する。そしてそのような追想に民族は常に新たに想いを至さざるをえない。／ところでこのように詩作において創設された存在は常に全体における存在者、すなわち神々、大地、人間、そしてその歴史における——歴史としての、ということはつまり民族としての——人間を包括している。²³

悲劇的な詩に内在的な「留まり続ける追想」または「想起」の決定的次元は、第一のギリシャ的な始原に対するヘルダーリン的な詩による回答によって遂行される。すなわち想起の状態はシラーの問い合わせ(「美しい世界よ、お前はどこにいる?」)²⁴、つまり「ギリシャ世界よ、お前はどこにいる?」に対する回答を「ドイツ的-西洋的」な神話という待望された可能性によって与えるのである。ヘルダーリンの意気軒高たる詩の悲劇的な言葉は、第一の始原から別の始原への移行としての歴史性ないしは時間性を「感性的(sinnlich)」なものにし、経験可能にする。なぜならこの言葉は——キルケゴー尔とともにこう言うことができよう「先へと向けられた(nach vorne)」想起としての想起の上に建てられているからである。——それゆえこの言葉は「再度の始まり(Wiederanfang)」²⁵としてのもう一つ

²² 以下を参照。「歴史の根柢、すなわち、存在の伝説」(HEIDEGGER, *Überlegungen XIV* (1940-1941), GA 96, S. 206.)。同じ箇所においてハイデガーは、「技術の最先端」は「機械とエンジン」において達成されるのではなく、「神話」と人がそう呼ぶものが、計算(Berechnung)の対象とされ、悲劇的なものがドラマツルギー的な算定(Errechnung)へと委ねられてしまうときに」(S. 206)達成されるのだと述べている。

²³ HEIDEGGER, *Hölderlins Hymnen* (1934/35), GA 39, S. 214-215. [邦訳 240-241 頁]。また、以下を参照。*"Andenken" und "Mnemosyne"* (1939), GA 75, S. 10-26, *Wesen des Grundes* (1929), GA, S. 165. 「伝説」としての神話が有する想起的な次元(erinnernde Dimension)は、「回想(Andenken)」という概念によって示される。ハイデガーが $\mu\nuθoς$ の語源に関する論争を知っていたことは疑いようがないと思われる。 $\mu\nuθoς$ は、*meudb-, *mudb- すなわち「思い出す(sich erinnern)」、「憧れる(sich sehnen)」、「心配(Sorge)」に由来し、根底的な意味は、「思惟(Gedanke)」である(以下を参照。G. STÄHLIN, « $\mu\nuθoς$ », in *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Bd. IV, Kohlhammer, Stuttgart, 1942, S. 772-773.)。

²⁴ SCHILLER, *Die Götter Griechenlands*, 第1句。

²⁵ 以下を参照。「芸術が起こるとき、つまり始原が存在するときは常に、歴史にはひとつの衝撃が起こり、歴史は初めから、再度、始まる」(HEIDEGGER, *Ursprung* (1935/36), GA 5, S. 65)。また以下も参照されたい。*Der Anfang* (1932), GA 35, S. 99(「始原的な始原の再度の始まり」), *Beiträge* (1936-38), GA 65, S. 434(「再度の始原」), *Besinnung* (1938-39), GA 66, S. 67(「再度の始まりの自覚」), *Winken*

の始原を新たな「祖国の」、そして「再度の始まりの」「歌い方」によって可能にする²⁶。

この予期的な（期待と希望を生み出す）想起はヘルダーリンの『宗教について』で言われるよう、「精神における反復」²⁷として遂行される。それは類比的な仕方で歴史の「生成」（あるいは経験）を再生産するものではなく、この想起によって初めて生成がもたらされ生じことになるのである。「あらゆる真に悲劇的な言葉の徹頭徹尾独自なところが不斷に創造的なものとなる」²⁸のであるから、この言葉はそれ自体が絶えざる「没落（Untergang）」であり、絶えざる「崩壊」、つまり歴史的なものとしての時間性の時熟（Zeitung der Zeitlichkeit als Geschichtlichkeit）であり、そしてハイデガーによればそうであればこそこうした崩壊は「歴史性の法則」²⁹に即した仕方で民族にとっての法となるのである。

比喩・置き移し（Metapher）としてのヘルダーリンの詩は移送（Transport）の働きを、より厳密には「移行（Übergang）」の働きをするものであり、それはこうして歴史的生成（das geschichtliche Werden）の根・源（Ur-Sprung）、源泉（fons〔泉〕、fundus〔底〕）、あるいは始原（原理）であって、これらが歴史的生成をヘルダーリンの言葉へと翻訳するのである。換言すれば次のように言える。ヘルダーリンの詩はこの比喩的な翻訳効果によって歴史的民族（あるいはハイデガーが思い描いているように「形而上学的民族」）を規定する条件となる。そして彼の詩作はこの民族の歴史をその作用（Wirkung）（「実現すること」、

²⁶ Überlegungen II und Anweisungen (1931-1932), GA 94, S. 87（「始原の再度の始まり」）, S. 89（「再度の始まり」）, S. 100.（「始原とともに再度始めること〔…〕。古代を再び活性化する（Wiederbelebung）のではなく、〔…〕我々の民族と我々の任務を再び活性化すること」）

²⁷ 以下も参照されたい。「友よ！ ぼくはこう考える。われわれはもう現代に至るまでの詩人を注解しないだろう、歌い方は一般に別の性格をとるだろう、そしてわれわれは、ギリシャ人以来ふたたび、祖国にかない、自然にかなって、生得の独自性を以って歌い始めるのだから、世にうけいれられることはないだろう」(HÖLDERLIN, Brief an C. Böhlendorff (Herbst 1802), SW 3, S. 467. [邦訳 472 頁])。また以下を参照。「再度始まる詩作の最も偉大な冒険」(HEIDEGGER, Überlegungen IV (1934-36), GA 94, S. 216)。ヘルダーリンが言うところの別の、新たな「歌い方」というテーマは、ゲオルグの受容においても極端な多くの重点を占めることになった。以下を参照されたい。N. v. HELLINGRATH, « Vorrede zu Band IV » (1916), in : Hölderlin-Vermächtnis, op. cit., S. 105; M. KOMMERELL, Der Dichter als Führer, op. cit., S. 463, S. 469, S. 472.

²⁸ HÖLDERLIN, Über Religion, SW 2, S. 563. [邦訳 38 頁]

²⁹ HÖLDERLIN, Werden im Vergehen, SW 2, S. 447. [邦訳 43 頁]

²⁹ 以下を参照。「一つの歴史的民族の歴史性の法則の言うところは、一つの人間性の『本性的なもの』は、その民族の歴史の『歴史的なるもの』としてのみ、真にその『自然』である、ということである。それゆえ、自然本性の『固有のもの』、それはその使用において最も困難なのである。〔…〕しかし、ヘルダーリンは、ドイツ——西洋的な歴史の歴史性の法則が何であるかを知っているばかりではない。ヘルダーリンは同時に、如何にして、この法則が唯一経験され言われ得るのかも知っていた。この法則は、詩人に対してのみ自らを明かすのである！ なぜ、そうあらねばならないか？ なぜ歴史のこの法則は、従ってまた西洋的なるドイツ人の人間本性の本質法則は、ドイツ人の決定的なる歴史的時代において、詩人の言葉として言わねばならぬのであろうか？」(HEIDEGGER, Hölderlins Hymne "Der Ister" (1942), GA 53, S. 170 [邦訳 200-201 頁])、「歴史的民族の最も内奥にあり形作られていく法則」(Überlegungen IV (1936), GA 94, S. 287)、「歴史的な形成は、それに固有の法則をもつ」(Überlegungen V (ca. 1937), GA 94, S. 361)。ハイデガーは 1930 年代において、ヘルダーリンの「国民的なもの（Nationelles）」の弁証法を援用し、それを、短絡的にも、ニーチェにおけるアポロとディオニソスの対比と結びつけている。それによって、世界と大地、テクネー（技術）とピュシス（自然）のあいだの悲劇的な対立について思索しようと試み、そして、「ドイツ人の歴史的使命がもつ隠された様式法則（Stilgesetz）」と彼が呼ぶものを明確化しようと試みている。以下を参照されたい。HEIDEGGER, Hölderlins Hymnen (1934/35), GA 39, S. 293-294; Nietzsche I, GA 6.1, S. 104-105.

「実現化」³⁰⁾ それ自身によって産出するのであり、この歴史をその「作品・働き (Werk)」によって現実に (wirklich) (その事実的な現実性において、すなわちその「存在」において) 規定すると (誤って) 想定されたのである³¹⁾。

この「精神における反復」によって第一の現実的な始原への想起としての「言い伝え」(「伝説 (Sage)」) は、ギリシャの神話を「ドイツ的 - 西洋的」な「言 (Sage)」へと類比的に移し直すことで、可能な別な始原を投げ企てる。この別の始原は「新たな世界」が形而上学の歴史との想起による対決を通じて現れるための前提条件として、第一の始原の止揚ないしは超克を要求する³²⁾。

ヘルダーリンの詩作はこうして「祖国」の「密令」としての $\alpha\text{-}\lambda\acute{\eta}\theta\epsilon\iota\alpha$ [非 - 隠蔽性・真理] を詩作することで、ドイツ民族の歴史のもう一つの始原 (始まること (das Incipit)) を創設するとされる³³⁾。ここにこそ歴史の神話 - 學がもつ悲劇的な次元がある。なぜならこの新たな「帝国」、より正確には「芸術の帝国」の「密令」(「存在」)³⁴⁾を基づけるための前提条件は、「禁じられた果実」を全景へともたらすはずの「没落」を行く道なのである。ヘルダーリンの作品はただ没落を通じてのみこの始原を創設できる。というのも (形而上学の歴史としての) 第一の始原の歴史が没落することは、別の始原が開かれることの約束、ないしはその予言となっているからである。悲劇は没落とともに始まる。「悲劇が始まる (incipit tragoedia)」³⁵⁾。別の始原への「移行」としての「没落」('Untergang' als 'Übergang') という逆説的な論理は、悲劇に関するハイデガーの思索にとって根本的な操作的図式であ

³⁰ HEIDEGGER, *Winke* (1931-1932), GA 94, S. 31, S. 34, S. 35.

³¹ 以下を参照。「詩的な仕方で歴史は性起する。それは詩作 (Dichtung) であるのだから、そのなか、ポエジー (Poesie) のなかにこそ、それは、住まう。——すなわち、史学的 (historisch) な仕方で、つまりただ非 - 詩的な仕方でのみなされた歴史の描写は表象に対して立つ、より高位の真実は。／詩的な仕方は、歴史の芽生え (Aufgang) だけではない。詩的な仕方は、とりわけ、歴史の一つの時代から次の来るべき時代への移行 (Übergang) である。というのも、そのような移行は、ただ没落 (Untergang) としてのみあるのであって、我々はそれを終わりとしても自然への退行としても考えてはならないのである。没落は、始原の芽生えの開始 (der aufgehende Beginn des Anfangs) である。記憶におけるこの歴史の成り行きよりも、詩的な如何なる歴史も存在しない。」(HEIDEGGER, *Zu Ereignis V* (ca. 1943-1945), GA 73.1, S. 681)、「思索は、性 - 起する (er-eignet)。性 - 起は、唯一のヘルダーリンの詩作としての歴史である」(*Das Ereignis* (1941/42), GA 71, S. 307)。

³² 以下を参照。「終わりへと向かうもの、既在 (Gewesenes) としてまだ本質現成している (wesen) ものへの記憶を呼び起こすこと。それも、これを再びなにか指導的なものにするためにではなく、これを創造的な超克に向けて待機させるために」(HEIDEGGER, *Überlegungen V*, GA 94 (ca. 1937), S. 354)、[さらに以下を参照] *Überlegungen IX* (1938/39), GA 95, S. 214.

³³ 以下を参照。HEIDEGGER, *Hölderlins Hymnen* (1934/35), GA 39, S. 119-121; Hölderlin, *Germanien*, 第 84-96 句。1930 年代のこの文脈では、影響力に満ちていたゲオルグ的な「密令をうけたドイツ」の神話学者が、明らかに、ハイデガーのヘルダーリン解釈に影響を及ぼしていた。ハイデガーはこのゲオルグ的な神話学を継承したのであり、民族の「史的存在」、つまり「祖国」を「密令」ないしは $\alpha\text{-}\lambda\acute{\eta}\theta\epsilon\iota\alpha$ [非 - 隠蔽性] (「不 - 腹藏性 (Un-verborgenheit)」) として書き換えることで、それをさらに深化させたのである。ゲオルグ = クライスで広まっていた「密令をうけたドイツ」という表象については、以下を参照されたい。「私は我々を「ヘルダーリンの民族」と呼ぶ。なぜなら、内奥で燃えるドイツの中核は、その表面であるところの燃え殻の表皮の無限にずっと下にあり、それは密令をうけたドイツにおいてのみ、白日の下へと出ることができるからである。(N. v. HELLINGRATH, « Hölderlin und die Deutschen » (1915), in : *Hölderlin-Vermächtnis*, op. cit., S.120.)

³⁴ 以下を参照。「つまり彼らは創設しようと欲したのだ／芸術の帝国を」(HÖLDERLIN, ...meinest du es sollte geben..., 第 3-4 句 (SW 1, S. 399)).

り、ヘルダーリンの詩作との「対話」において発展させられたものである。「没落はもう一つの始原への移行である」³⁵。

この悲劇的な没落の図式は回帰の神話的な図式 (das mythische Schema der Wiederkehr) と呼びうるものと絡み合っている。1938／39年の『省察』のメモにおいては、以下のように言われる。「始原は没落の根拠であって、この没落は『終わり』ではなくて始原の環 (Rund des Anfangs) である」ということが、『悲劇的なもの』の本質をなすことを見えてとるなら、存在の本質には、悲劇的なものが属するのである³⁶。「第一の始原」の復帰 (Rückkehr) ないしは回帰 (Wiederkehr) としての「別の始原」が、可能性として生じるためには、「存在の車輪 (Rad des Seyns)」が回転しなければならず、そうして、古い世界が自ずから崩壊し、新たな世界が出現するようにしなければならない³⁷。

「再度の始まり」としての「別の始原」は、革命 (Revolution) (「変転 (Umwälzung)」、「反転」、「転覆」、「公転 (Revolution)」) によって呼び起こされる「没落」を経てようやくその働きを及ぼすようになる。この革命は最深部にまで及ぶ変化 (μεταβολή [転換]) を生み出すのであり、ハイデガーはこれを「全体の変転」や「大いなる反転」³⁸と呼び、あるいは『哲学への寄与論文』では「根本からすべてを捉える本質的な転回」³⁹と言われる。

³⁵ HEIDEGGER, *Überlegungen XV* (1941), GA 96, S. 252. また、以下を参照。「この没落は第一の始原である」(Beiträge (1936-38), GA 65, S. 397)、Hölderlin's Hymne "Andenken", GA 52, S. 88; 「もしも「没落」が終わりではなく、始まりでなければならないとしたら、どうだろうか? どのギリシャ悲劇も没落について語る。この没落のどれも、本質的なものの始原であり芽生えである」(Parmenides (1942/43), GA 54, S. 167-168)、Anfang (1941), GA 70, S. 139. ハイデガーの存在史的な思索は、それ自身が没落の兆しを帯びていることによって(以下を参照。「我々の時間は、没落の時代である」(HEIDEGGER, Beiträge (1936-38), GA 65, S. 397))。この「我々の時間 (unsere Stunde)」は、「昼の時間」にも、また「永遠の瞬間」にも関連している。Nietzsche (1937), GA 44, S. 148-149)、ニーチェの「ヨーロッパの悲劇的時代」についての診断と一致する。(NIETZSCHE, *Nachgelassene Fragmente* (1886-1887), 7 [31] [断片番号 31], *Kritische Studienausgabe* (KSA), 12/306)。ハイデガーでは以下において引用されている。Nietzsche I, GA 6.1, S. 247, S. 282; Nietzsche (1937), GA 44, S. 64. また、以下を参照。NIETZSCHE, *Ecce Homo*, KSA 6/313)。この没落は、「新しい時代」への移行を準備するものである (Nietzsche (1937), GA 44, S. 236 [邦訳 226 頁])。

³⁶ HEIDEGGER, *Besinnung* (1938-39), GA 66, S. 223. ハイデガーにおける回帰の神話的図式については H. ブルーメンベルクの考察を参照されたい。H. BLUMENBERG, *Arbeit am Mythos*, Frankfurt/M., Suhrkamp, 1979, S. 61; 「神話という現実性概念、神話という作用可能性」(1971), in: *Ästhetische und metaphorologische Schriften*, Suhrkamp, Frankfurt/M., 2001, S. 369.

³⁷ 以下を参照。「我々には計り知れない時において、再び「存在の車輪 (Rad des Seyns)」は回転する」(HEIDEGGER, *Überlegungen IV* (1936), GA 94, S. 292)。このニーチェの『ツアラトウストラはかく語りき』における「存在の車輪 (Rad des Seins)」を指示していると思われる驚くべき表現(「一切は行き、一切は帰ってくる。存在の車輪は永遠にめぐる。」(KSA 4/272 [氷上英廣訳, 岩波文庫, 132 頁]))。また次を参照。HEIDEGGER, *Nietzsche I*, GA 6.1, S. 274) は、ひょっとするとヘルダーリンの『エンペドクレスの死』第 3 草稿の第 319-320 句「行け! 何も恐れるな! すべては回帰する。/そして起こるべきことは、既に完了した」(SW 2, S. 409 [邦訳 404 頁]) を思わせるものかもしれない。

³⁸ 以下を参照。「我々の眼前にあるのは、全体の転換または完全な無秩序だ(前者が後者を完遂する、ないしは後者として前者が任務を引き受ける)。/これが決断である。この全体の転換を、根本から準備すること——初めて、その空間と深みを達成すること」(HEIDEGGER, *Zu Ereignis IV* (ca. 1935), GA 73.1, S. 551)。「今やしかし、危機は、偉大な転換であり、それは「一切の価値の価値転換」の彼岸にあり、それはそこにおいて存在者が人間からではなく人間存在 (Menschensein) が存在 (Seyn) から基づけられる転換である」(Beiträge (1936-38), GA 65, S. 184)。

³⁹ HEIDEGGER, *Beiträge* (1936-38), GA 65, S. 28. [邦訳 33 頁]

このような形而 - 上学的な革命の思想は——これこそが我々の仮説なのだが——1930年代におけるハイデガーの「意志」ないしは「思索意志 (Denkwille)」全体を濃縮させ、そこに構造を与えていた。実際、彼は1936年の『黒ノート』のメモにおいて自ら次のように示唆している。「存在の真理の成就としての現存在へ反転すること——私の唯一の意志」⁴⁰。

『没落する祖国 (Das untergehende Vaterland)』所収のヘルダーリンの論文「移ろいのなかの生成 (Werden im Vergehen)」においては、「神話的な状態」こそが「有限で古い」世界を「無限で新しい」⁴¹世界と結びつけ「新しい世界」を形づくるものであるとされる。この「崩壊」は「事実的な現実 (faktische Wirklichkeit)」から「实际上、可能的なもの (das real Mögliche)」への「移行」として展開され、崩壊の経験ならびに崩壊したものへの想起に至る。[ヘルダーリンは、当該論文において次のように述べている。]「けれど現実性が自ら崩壊することで可能的なものが現実性へといたる時、これは作用を及ぼし崩壊の感覚ならびに崩壊したものの記憶を生み出す」⁴²。ところでまさにこの古い世界から新しい世界への移行こそ、ヘルダーリンが「神話的な状態」と呼ぶものであり、ハイデガーが別の箇所において可能的なもの (*ἐνέργεια ἀτελής* [いまだテロスに達していない現実態] としての *δύναμις* [潜勢態]) の特殊な *ἐνέργεια* [現実態] として捉えたものである⁴³。ヘルダーリンによれば悲劇的な詩の超越論的で創造的な行為の本質は「観念的・個別的な (idealindividuell) ものと実在的・無限的な (realunendlich) ものを統一すること」に存しており、したがってその「産物」は「観念的・個別的なものと統一化された実在的・無限的なものであり [...] そこにおいては、無限的・実在的なものは、個別的・観念的なもの形を、そしてこの個別的・理念的なものは、無限的・実在的なものの生命を受け取り、両者とも神話的な状況において統一される。この状況においては無限的・実在的なものと有限的・観念的なものの対立によって移行も終わりを迎えるのである」⁴⁴。

観念的な崩壊というアスペクトにおいて悲劇的な詩は、それが言葉であるという点にお

⁴⁰ HEIDEGGER, *Überlegungen IV* (1936), GA 94, S. 259. また、次を参照されたい。「形而 - 上学的な思索とは、存在の変遷を究 - 思すること (Er-denken)——思索的な貫徹——である」(同上, S. 256)。ハイデガーはさらに、この「意志」を、かれの名前 [Heidegger] のなかにある二つの ‘g’ の一つに投影するとまで言う (次を参照。GA 94, S. 259)。この「意志」という語彙 (以下を参照されたい。「精神的 - 歴史的な未来意志」(GA 94, S. 121)、「目標への意志——存在の真実への意志」(同上, S. 316)、「基づけると欲する意志 (Gründenwollen)」(同上, S. 317)、「移行への意志」としての「存在の思索」(*Überlegungen VIII* (1938/39), GA 95, S. 95)、「根源への意志」(*Überlegungen IX* (1938/39), GA 95, S. 229)) のなかに、ニーチェの「力への意志」を「存在史的に」再解釈した結果を困難なく見出すことができるだろう。「力への意志」は、(存在への)「全権付与 (Ermächtigung)」の概念において頂点に達するのであり、これは技術 - 帝国的な (存在者の)「陰謀 (Machenschaft)」に抵抗するのである。以下を参照されたい。Winke (1931-1932), GA 94, S. 36, S. 40, S. 43; *Überlegungen und Winke III* (ca. 1933-34), GA 94, S. 140; *Überlegungen IV* (1936), GA 94, S. 211.

⁴¹ HÖLDERLIN, *Werden im Vergehen*, SW 2, S. 451.

⁴² 同上, S. 447.

⁴³ 以下も参照されたい。HEIDEGGER, *Beiträge* (1936-38), GA 65, S. 244. アリストテレスの *δύναμις / ἐνέργεια* [潜勢態／現実態] (Met. 1047a24-26) の教義についての 1920 年代のハイデガーの解釈については、以下を参照されたい。C. SOMMER, *Heidegger, Aristote, Luther. Les sources aristotéliciennes et néo-testamentaires d'Être et Temps*, PUF, Paris, 2005, S. 101-119.

⁴⁴ HÖLDERLIN, *Werden im Vergehen*, SW 2, S. 450.

いて⁴⁵、つまり「新たな世界」を作り出す反省的で「世界形成的（weltbildend）」⁴⁶な働きである点において、創造的な働きとして現れる。詩はこうして歴史的生成（das geschichtliche Werden）に内在する変遷の契機を取り上げ、その結果それの実際の展開を想像するか、あるいは夢想する。すなわち詩はドイツ民族の「精神的世界」となる——と、ハイデガーはそう望んでいるわけだが——ような「新たな世界」を形成するのである。

ここで二つの観点を確認しておかなければならない。一方ではヘルダーリンの「神話的な状態」という概念のおかげでハイデガーに可能になったのは、「新たな」世界が——潜在的には——それによって創造され得るところの「世界形成（Weltbildung）」として、詩を理解することであった。この新たな（精神的な）世界に関して、詩はいかなる像も与えない。これは技術によって形づくられる（technomorphen）ものという意味における世界像（Weltbild）、つまりハイデガーがたとえば1938年の講演において批判する主觀主義的な世界観の対象となるものではなく⁴⁷、本質的には「知的直観の比喩」としての世界という産物である。「世界形成」としてのヘルダーリンの詩がもつ意義は、1934年講義においては以下のように定式化されている。「言葉の本質（Wesen）は言葉が世界形成的な力として生起するところで本質現成する（wesen）のであり、すなわち言葉がはじめて存在者の存在をあらかじめ先に形成し、接合構造へもたらすところで本質現成するのである。根源的な言葉とは詩作の言葉である」⁴⁸。

比喩的能力としての詩とは、構想力（Einbildungskraft〔像を形成する力〕）である。詩の言葉は「神話の形成的な力」あるいは「神話的想像」として把握され得るものであり、1929／30年の「世界形成」の観念に由来する。それはすなわち「精神的世界」の形成としての「世界形成」であり、この世界形成はコスモ・ポイエーシス（Kosmo-Poiesis〔宇宙・詩／宇宙・制作〕）として理解されるべき⁴⁹。そのコスモ・ポイエーシス的な機能において

⁴⁵ 以下を参照されたい。「この創造的な反省の産物が、言語なのだ」（HÖLDERLIN, *Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes*, SW 2, S. 551. [邦訳 27 頁]）

⁴⁶ HÖLDERLIN, *Werden im Vergehen*, SW 2, S. 446. [邦訳 42 頁]

⁴⁷ HEIDEGGER, *Die Zeit des Weltbildes* (1938), GA 5, S. 94. [邦訳 107 頁]

⁴⁸ HEIDEGGER, *Logik* (1934), GA 38, S. 170. [邦訳 189 頁]

⁴⁹ カッシーラーの『神話的思考（Das mythische Denken）』の批評においてハイデガーは、「神話の形成的な力」としての「根本能力」が、「神話的な想像力（Phantasie）として [...] 完全に説明されていない」ままになっている、と遺憾の念を表している（HEIDEGGER, *Beschreibung* (1929), GA 3, S. 263, S. 269）。また以下〔のカッシーラーの記述〕も参照されたい。「ヘルダーリンにとって神話とは、そこにおいて思考が言葉を身に纏うようなたんなる外的でアレゴリー的な象徴ではなく、神話は彼にとっては、根源的で絶えることのない精神的な生命形式（Lebensform）である。神話的な想像力は、我々が事後的に現実の像に付け加えるようなたんなる飾りの部分なのではなく、それは、現実を把握するために不可欠な器官の一つなのである」（E. CASSIRER, « Hölderlin und der deutsche Idealismus », in : Ernst Cassirer. *Gesammelte Werke*, Bd. 9, *Aufsätze und kleine Schriften* (1902-1921), Meiner, Hamburg, 2001, S. 352）。「世界形成」の概念（Grundbegriffe (1929/30), GA 29/30, § 68）が、確かに、カントの「根本能力」としての構想力の図式論のジンテーゼから転じたものであるということが誤っていないとすれば（*Phänomenologische Interpretation* (1927/28), GA 25, § 24; Kant, GA 3, 第3部）、この概念発生の核には、アリストテレスのポイエーシス的な *vouc* [知性・理性] (*De an.*, III, 6, 430a27-28) が、「統一体を形成する認取（einheitbildendes Vernehmen）」として、また、*λόγος ἀποφαντικός* [主張的命題の論理] の開示ないしは腹蔵の可能性の源として解釈された上で（Grundbegriffe (1929/30), GA 29/30, S. 454-455）、働いていることを見逃してはならないだろう。この発生は、ひょっとするとすでに1929／30年の段階において、ニーチェがヘラクレイトス的な子どもの遊びに帰した「世

ヘルダーリンの詩は「民族の原 - 言語 (Ursprache eines Volkes)」⁵⁰として働くことで「アルカイックな」⁵¹層を前景へともたらし、「論理学の破壊」⁵²というハイデガーのプロジェクトに寄与する。というのも「原 - 言語」としてのヘルダーリンの詩作は、それが「前 - 述語的な開顕可能性 (vorprädikative Offenbarkeit)」あるいは「前 - 論理学的な真理 (prälogische Wahrheit)」⁵³を指し示すがゆえに、つまりヘスペリア的ないしは西洋的なゲルマニエンの「密令」としての $\alpha\text{-}\lambda\eta\theta\varepsilon\iota\alpha$ [非 - 隠遮性] を詩作するがゆえに、言語の述語的本質 (apophantisches Wesen) の彼岸で展開されていくのである。

他方で——そしてこれが顧慮されるべき第二の観点なのだが——「神話的な状態」とは、それがひとつの可能的な「新たな世界」の創造である点において、期待が向かう想像的対象 (fantasmatischer Gegenstand) であり、可能的なものの登場に対する希望の源である。それゆえこの状態は、一つの宗教的な (religiös) 次元を暗示するのである。神話としての詩はヘルダーリンが「ポエジー的な宗教」と呼ぶものの中央に位置している。「こうしてすべての宗教はその本質から見てポエジー的ということになるだろう」⁵⁴。悲劇の歌としてのヘルダーリンの詩作は、その構成員を統一し結び合わせることで、民族共同体のコロス (Chor) を作り上げるものとなる。この詩作による総合において、宗教的な（「ポエジー的な」）次元は、超 - 政治的 (metapolitisch) な次元と一致することになる。というのも神話の「密令」は、ヘルダーリンが『宗教について』で望んだ意味において、民族共同体を結び合わせる（団結させた (religit)）のである。すなわち「そこで各人が各人の神をうやまい、またすべての者がひとつの共同体的な神を詩作的な表象において敬うような、また

界形成的な力】によって導かれていたのかもしれない。以下を参照されたい。「集結した世界像」としての「神話」 (*Die Geburt der Tragödie*, KSA 1/153, 145)。結局、(人間的な) 幻想は、自らを存在の幻想の反響にしてしまう点において、失敗しているのである。「存在の想像 (φαντασία) の前では、人間の構想力〔想像力〕など、欲張りな表象の吃る音にすぎない」 *Anmerkungen III* (1946-47), GA 97, S. 248)。

⁵⁰ 以下を参照。「だが、本質に即して見るなら、言語はそれ自体が根源的な詩作なのであり、狭義の意味で、言語のなかで詩作されたもの——我々が特に「詩作」と呼ぶものは、一つの民族の原 - 言語である」 (HEIDEGGER, *Hölderlins Hymnen* (1934/35), GA 39, S. 217)、「思索は、一つの歴史的民族の原 - 言語である」 (*Hölderlin* (1936), GA 4, S. 43)。ヘルダーリンの言葉を通じたドイツ民族の「本質現成 (Wesen)」で言われていることの定義を、ハイデガーは、ヘリングラートの傍らへともたらす (N. v. HELLINGRATH, « Hölderlin und die Deutschen » (1915), in : *Hölderlin-Vermächtnis*, op. cit., S. 124-125)。ヘリングラートは、ヘルダーの後継者として、断固たる調子で次のように述べている。「言語は、民族の魂であり、民族の境界であり、民族の核である」。また、その普遍的使命を果たすよう定められている『ドイツ国民に告ぐ』におけるフィヒテの「原 - 民族」の「原 - 言語」という理念も参照せよ (FICHTES Reden an die deutsche Nation (1807/08), in : *Johann Gottlieb Fichtes sämmtliche Werke*, Bd. VII, WDG, Berlin, 1971)。

⁵¹ ハイデガーにとってこのような言語の「アルカイックな層」の追求における指導者となったのは、以下の著作であった。E. HOFFMANN, *Die Sprache und die archaische Logik*, Mohr / Siebeck, Tübingen, 1925; J. STENZEL, « Über den Einfluss der griechischen Sprache auf die philosophische Begriffsbildung », in : *Kleine Schriften zur griechischen Philosophie*, Gentner, Darmstadt, 1956, S. 72-84; « Über den Zusammenhang des Dichterischen und Religiösen bei Platon », in : *Kleine Schriften zur griechischen Philosophie*, S. 107-126.

⁵² 以下を参照。(HEIDEGGER, *Was ist Metaphysik?* (1929), GA 9, S. 117; 「我々は論理学そのものを、その出発点から根本的に動搖せしめようと思う」 (*Logik* (1934), GA 38, S. 8 [邦訳 12 頁])。

⁵³ HEIDEGGER, *Grundbegriffe* (1929/30), GA 29/30, S. 496.

⁵⁴ HÖLDERLIN, *Über Religion*, SW 2, S. 568. [邦訳 41 頁] また以下も参照されたい。「最も神聖な者のなかで／宗教と詩とが結びついているところにおいて／ダンテは大司教の位置にある」(SCHELLING, « Über Dante in philosophischer Beziehung » (1803), in : *Schellings Werke*, Münchener Jubiläumsdruck, Dritter Hauptband, Beck, München, 3. Aufl. 1977, S. 572)。

そこで各人がそれぞれの高次の生き方を、すべての者がひとつの共同体的な高次の生き方を、すなわち生の祭典を神話的に祝うような、多くの宗教のひとつの宗教への統一」⁵⁵という意味において。この「共同体的な神」は「言い伝えの神」(Gott der Mythe)である——「人格的な部分も歴史的な部分も、本来の主要部分、すなわち言い伝えの神に対してはつねにたんなる副次的な部分にすぎない」⁵⁶ということが忘れられない限りは。

ヘルダーリンによる「伝説」(「寓話」、「言い伝え」)としての悲劇の詩作は、この「民族共同体」の神々を詩作するものとされる。というのもヘルダーリンの「伝説」はハイデガーにおいては「前 - 歴史的ならびに原 - 歴史的なもの (Vor- und Urgeschichtliches)」⁵⁷から語られるような「物語 (Erzählung)」とは解釈されず、自意的な(tautologisch)意味での「真なる言葉」として、1928／29年講義の表現に即して言えば「神話に特有な真理」⁵⁸を表現する真なる言葉として解釈されるのだが、この「伝説」は「神々の歴史」⁵⁹としてのμῦθος〔神話〕の意味をも、本質的に、内包しているのであって、——このように語るときハイデガーはヘシオドスとホメロスを解釈するプラトンを巡って動いているのである。

以上において詳細を示すことまではできなかったが、少なくとも仮説的な仕方で次のことは示唆できただろう。すなわち「普遍的な意味 (Allgemeinsinn)」(『宗教について』)に関するヘルダーリン的思弁と悲劇的なものについての詩学が、1934／35年頃のハイデガーによって受容され、換骨奪胎されたということ。しかもそれは国家 - 「社会主義」(National-‘Sozialismus') という政治的ないしは超 - 政治的な文脈において行われたのであり、そしてこの国家社会主義をハイデガーは悲劇的「共同体」の「国家的社会主義 (der nationale Sozialismus)」そして「一国 (nationell) - 社会主義として理解した (というよりはむしろ誤解した) ということ。そしてこの「共同体」の成員を、民族の神々を先んじて詩作するヘルダーリンの詩作は、奇妙な存在史的な「共産主義」において互いに結び合わせるとさ

⁵⁵ HÖLDERLIN, *Über Religion*, SW 2, S. 568. [邦訳 41 頁]

⁵⁶ 同上。

⁵⁷ 以下を参照。「検証不可能な前 - 歴史的なもの、または原 - 歴史的なものから語られる物語としての伝説 (Sage) ではなく、根源的な言うこと (Sagen) ——あるいはむしろ、こう言うべきか——始原的な言うこととしての伝説。そこにおいて、言語において言語が生じ、それとして言語は生じる」(HEIDEGGER, *Zu Ereignis II* (ca. 1935), GA 73.1, S. 261)。

⁵⁸ HEIDEGGER, *Einleitung* (1928/29), GA 27, S. 362.

⁵⁹ 以下を参照。HEIDEGGER, *Überlegungen IX* (1938/39), GA 95, S. 181; 「存在の名指しとしての言葉、μῦθος〔神話〕」は、その始原的な覗き込みと輝きにおいて、存在を名指す——τὸ θεῖον〔神的なもの〕を、すなわち神々を名指す」(*Parmenides* (1942/43), GA 54, S. 165)。「それゆえ、神的なものは、「神話的なもの」なのだ。それゆえ、神々の伝説は「神話」なのだ」(同上, S. 166)、「差し当たり θεόλογος〔神学者〕や θεολογία〔神学〕が意味するのは、宗教的樂節や教会の教義への関係を欠いた、神々の神話的 - 詩作的な言うこと (Sagen) である」(*Die ontotheologische Verfassung der Metaphysik* (1957), GA 11, S. 62)。また、以下も参照されたい。PLATON, Rep., 392 a ; G. STÄHLIN, «μῦθος», op. cit., S. 775; 「ところで神々の歴史は、詩人たち自身のなかへと向かうのであり、彼らのなかでそれは神々の歴史となるのであり、彼らのなかで花開くのであり、彼らのなかで初めて現にあり、言い表されるのである」(SCHELLING, *Historisch-kritische Einleitung in die Philosophie der Mythologie* (1842), in: *Ausgewählte Schriften*, Bd. 5, Suhrkamp, Frankfurt/M., 1985, S. 30)。ハイデガーは、様々な観点において、W.F.オットーの自意的な(tautologisch)、真理論的な(alethisch)、そして神祭的な(theophanisch)神話の解釈を共有している。以下を参照されたい。W. F. OTTO, *Dionysos. Mythos und Kultus* (1933), Klostermann, Frankfurt/M., 6. Auflage, 1996, S. 31; 同上, S. 44; 「神話としての言語」(in: E. Preterius et al. (Hrsg.), *Die Sprache*, R. Oldenbourg, München, 1959, S. 121)、「詩人の使命への召喚 (Berufung des Dichters)」(in: *Die Gestalt und das Sein*, WBG, Darmstadt, 1959, S. 303)。

れているということ、である⁶⁰。「民族」の本質を思索しようとするその意志に目をくらませ、いわゆる「民族的世界觀 (die völkische Weltanschauung)」との分裂的で危険をはらんだ対決 (Auseinandersetzung) へと突き進んだハイデガーは、こうしてこの民族の神々への神学的な問い合わせと導かれていった。その民族の本質はただヘルダーリンの詩作によってのみ規定されうるものと考えられていた。というのもこの詩作は 1800 年以来「ドイツ的 - 西洋的」な「芸術の帝国」の時 - 空 (Zeit-Raum) を創造してきたと考えられているからだから。

実際、ある神こそがヘルダーリンの口を介してドイツ的なポリス・都市（「場所 (Stätte)」として理解された「国家 (Staat)」）に νόμος [法] を与えるはずのものであり、その結果このポリスはその始原において根拠づけられ、それによって民族の構成員は互いに結びつけられるはずなのである。この点においてヘルダーリンの νόμος βασιλεύς [王の法] は常に同時に νόμος θεῖος [神の法] であるのだ。ヘルダーリンの「原 - 言語」は民族のこの αρχή [始原・原理] を、歴史の原理（始原、根源）としてのその「守護神 (Genius)」または「精神」を名付ける。だがただ神のようなものだけがこのアルケーを創設することができるのだ⁶¹。より正確には次のように言うことができるだろう。ただ神の「根本歴史」あるいは「性起 (Ereignis)」だけがこれを行うことができる、と。民族が自身の「一国的なもの (Nationelles)」（自身の大地）の「自由な使用」として理解された「固有なもの (Eigenes)」へと到達するのは、ただ「性起」によってであり、これはハイデガーが 1934/35 年講義で述べているように「民族がその神々に対してもつ根本関係」⁶²をもたらすはずのもので

⁶⁰ 「共産主義」の τὸ κοινόν [ト・コイノン] についてのハイデガーの省察を参照されたい (*Koivón* (1939/40), GA 69, S. 191, S. 201-214; *Überlegungen XIII* (1940-1941), GA, S. 149-157)。戦後、ハイデガーは「共産主義」についての自身の思弁を、ヨーロッパ精神の存在史的な共産主義を準備するものとして解釈する。ひょっとするとそれは、ヘルダーリンが言う「精神たちのコミュニズム (Communismus der Geister)」（ヘリングラート版の第 3 版 (1943) において追加された）のことを意味するかもしれないが、しかしこの解釈はとりわけ、「共同体」についての自身の存在史的な思索と、政党としての社会主義の彼岸にある「国家社会主義」の「社会主義」とを後から回顧的に類比的に扱うことによってであろう。また、以下を参照。Anmerkungen II (ca. 1946-47), GA 97, S. 126-127; S. 130; 「「政治的なもの」は、もっぱら人間本質の本質現成と命運からのみ、とはつまり、しかしながら、存在の真理からのみ詩作され得るものである。 [...] 「政治」は命運ではなく、——そうではなく人間の「命運」が——存在の命運において性起するとき——、人間の共同本質に関わる限りにおいて、「政治的」なのである」（同上, S. 131）。

⁶¹ 以下を参照。「もちろん、我々人間は、始原を始原する〔始める〕ことはできない——それはただ神だけができる」 (HEIDEGGER, *Hölderlins Hymnen* (1934/35), GA 39, S. 3-4)、「常に、始まりには神がいる」 (W. F. OTTO, *Dionysos*, op. cit., S. 30)、HÖLDERLIN, *Brief an den Bruder*, Frühjahr 1801, SW 2, S. 450-451.

⁶² HEIDEGGER, *Hölderlins Hymnen* (1934/35), GA 39, S. 114; 「民族がその歴史的現存在を神々への再結合の根源的に統一的な経験の上に基づけるのかどうかという問い合わせ [...] いかにしてそうするのかという問い合わせ [...]。問題なのは、その存在の困窮から、またその存在のために神が民族の存在の中に真に現れるか否かということである。このような現れは根本的出来事とならざるをえない」（同上, S. 147 [邦訳 161 頁]）。また、以下を参照。「民族の本質は、神への聴従的帰属性 (Zugehörigkeit) に基づいて相互に属し合う者たちの歴史性に基づく。この聴従的帰属性がその内で歴史的に基づけられるところからの性起から初めて、次の問い合わせが発生するのである。すなわち、なぜ「生」と身体が、生殖と性が、系図が、根源語で言うなら大地が、歴史に属するのか、そしてそれぞれの仕方で再び歴史をみずから之内に取り戻すのか、そしてそれにもかかわらず、そのつど無制約的なものであることの最も内的な畏れに担われて、大地と世界の戦いにのみ従事するのか、という問い合わせである」 (*Beiträge* (1936-38), GA 65, S. 399 [邦訳 433 頁])。

あり、それも性起がこの根本関係を歴史として展開していくことによってそうなるのである。

民族（政治）と神々（神学）。1930年代にハイデガーの「肉体」を苦しめていたこの二つの「杭」あるいは「棘」は⁶³、このように分離不可能な統一体を形成しており、民族の形而上学がその民族の神々への問い合わせを内包するため、そこでは一方は他方と絡まり合っているのである。1934年講義においてハイデガーによって立てられた問い合わせ（「我々とは誰か？」）、その本質における「民族」への問い合わせがはらんだ一貫したモチーフは、この民族の神あるいは神々への問い合わせ、そしてその民族の歴史への問い合わせに通じるのである。これこそがハイデガーリー的な神学的・政治的な再神話学化の結び目であり原細胞なのである。「ある民族が民族であるのは、民族の神を見出すことの内で、自らの歴史を割り当てられて受け取るときのみである」⁶⁴。

訳注 A(本文8頁)：ニーチェの『悦ばし知識』断章342に同じ言葉が見られる。また『ツアラトウストラはかく語り』の序説冒頭を参照されたい。

⁶³ 以下を参照されたい。HEIDEGGER, *Brief an K. Jaspers*, 1. Juli 1935, in : Martin Heidegger / Karl Jaspers, *Briefwechsel 1920-1963*, Piper u. Klostermann, München u. Frankfurt/M., 1992, S. 157.

⁶⁴ HEIDEGGER, *Beiträge* (1936-38), GA 65, S. 398. また以下も参照されたい。Überlegungen XI (1939), GA 95, S. 414; Überlegungen VII (1938), GA 95, 25. ハイデガーにとってこの神々は、当然、「ギリシャの神々」ではなく、ドイツの神々である。「けれど我々は、神々とはつねに民族の神々であることを知っている。神々において民族の歴史的真理が顕になり、成就される」(*Hölderlins Hymnen* (1934/35), GA 39, S. 170[邦訳191頁])。また、以下も参照されたい。「神々、然り、ただ民族の神々」(Überlegungen IV (1934-1936), GA 94, S. 214)。